

## 再発した椎間板逸脱症の9例

2003. 12. 20

岐阜県開業 中原公彦

### はじめに

椎間板逸脱症は、椎間板物質が脊柱管内に脱出し脊髄に傷害が加わって発生する疾患である。その際、複数の部位で椎間板物質が逸脱する例は稀で、通常は1カ所の椎間板がその責任病巣であることが多い。

しかし椎間板逸脱症が発生した個体（犬）は、以前から髓核の変性が進行して、その弾力性を失ってきており、何らかの外力が加わった際に逸脱したと考えられ、すべての椎間板で発生の可能性はあり、再発も十分あり得る。

今回、椎間板逸脱症が再発した犬9頭について検討したところ、その発生率、発症部位、回復日数等について若干の知見が得られたので報告する。

### 症例

症例は、椎間板逸脱症にて減圧手術を実施したものの180症例（回復しなかったもの、術後まもなく死亡したものを除く）のうち、再発して再度減圧手術を行ったもの9例について検討した。

犬種は、ミニチュアダックスフンド7例、ビーグル、マルチーズ各1例であった。

初発時の平均年齢は7才令であった。

重症度は、頸部椎間板逸脱症のものは、頸部痛と四肢の固有知覚の低下を示しており、胸腰部椎間板逸脱症は後肢の不全麻痺を呈するものから、深部痛が消失している完全麻痺のものまで様々であった。

手術はすべて責任病巣のみに、片側椎弓手術もしくはベントラルスロット術を行い、脱出髓核を除去した。

### 結果

1. 再発した期間は1カ月から3年3カ月であり、**平均1年7カ月後**であった。
2. 再発率は180頭中9例で、**5%**であった。
3. 再発部位については、初発時と比べ**脱出部位が異なっていたもの8例**であり、同じ部位で再脱出していたのは1例であった。
4. 初回の時に石灰化していた**髓核が再発時に脱出した症例は、5例**あった。
5. **再発時の重症度**は、胸腰部椎間板逸脱症6例すべてが初発時と比べより**軽度**であった。（頸椎は同程度）
6. しかしその回復日数を比較すると、6例中4例が再発時の重症度が初発時より軽度にもかかわらず、**回復日数は延長**していた。（頸椎は不明）

## 考 察

同じ部位で再脱出していた1例は、初回の手術時には減圧手術にて脱出した髄核を除去したが、術後まだ椎間板には石灰化した髄核が残存しており、それが1カ月後に再脱出した症例であった。

他の8例は再脱出部が異なっており、さらにそのうち4例は**1つ前の椎間板が脱出**していた。また**石灰化していた髄核が脱出**して再発した症例が5例あった。このことは、再脱出が予測されるならば、初回の手術時に、その責任病巣である椎間板の前後の椎間板、もしくは石灰化した椎間板を造窓手術しておくべきであったことを示唆している。しかし再発率5%という数字を考えると、すべての椎間板逸脱症の症例に、減圧手術後さらに予防的に造窓術を併用すべきであるかは疑問である。

再発時の重症度が初発時と比べ軽度であったのは、飼い主の意識の問題で、再発して早期に来院した結果と思われた。

しかし**再発時の回復日数が延長傾向にあった**ことは、たとえ症状が初回より軽度でも、その予後についての十分なインフォームドコンセントが必要であることを示唆していた。